

The Gango Temple in Asuka and the Tales of the God of Thunder included in Nihon - Ryoiki : With the Stress on the Relation between Chiisakobe Sugaru and Dojohoshi, a Buddhist priest

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/47717

『日本靈異記』所収雷神説話と飛鳥元興寺

— 小子部栖輕と道場法師との關係を中心として —

原 田 行 造

序

蘇我馬子の戦勝記念寺として、崇峻元年（五八八）に着工された飛鳥元興寺は、百濟・高句麗兩國の支援のもとに工事は順調に進捗し、僅か八年後の推古四年（五九六）十一月に、一応の完成をみたという。筆者は、この特異な伽藍配置を持った高句麗様式の本格的なわが国最初の法師寺での仏教活動に、大伴氏の狭手彦流の子孫が大きく関わっており、同時に彼の子孫が紀伊国名草郡地方に集住していた事実から、大伴氏ゆかりの景戒が、道場法師系説話群をここで入手し得たという経路の想定を行なつて来た。そして、道場法師伝を中心として、各説話の形成過程についても若干の考察を展開し、その実態を探究してみた。だが、上巻第一話の小子部栖輕と同第三話（以下上3と記す。）の道場法師の所伝とが、飛鳥元興寺に流入する経緯について、尾張元興寺の周辺をもとにした追究には、更に異なつた視角から論証する余地が残るものと思われる。本稿では、『靈異記』巻頭部にあらわれた雷神信仰の変容につき概観し、その上に立脚して小子部栖輕と道場法師との関わりにつき論及してみようと思う。また、これら雷神制圧にまつわる説話を、飛鳥元興寺が熱心に収集した真因を、主として百濟大寺の建立をめぐる諸状況の精査を通して解明を加えることを志向するものである。

一、『日本靈異記』に登場する雷神の性格

小子部栖輕（上1）・道場法師（上3）・大部屋栖野古（上5）の諸伝は、ともに雷神信仰に關係しているが、ここに取りあげられた雷神の姿を辿ってゆけば、そこには顕著な変質が窺われる。即ち、上1では天皇が、空なる雷に挑戦して彼を捕捉し、ついでには栖輕の墓標に挟まれて零落した雷が描かれている。つづく上3では、地に落ちた雷が申し子を老夫に授けるが、その子は無類の力を發揮し、元興寺の鬼退治や、田の水争いに活躍する。そこには、雷神が申し子を通して仏教（寺院）に奉仕する形で取り扱われている。上5に至ると、霹靂の桶が、和泉国高脚浜に漂着して、それから造られた仏像は豊浦堂にて人々の尊崇を集め、物部守屋らの迫害にも屈せぬ力を發揮したわけで、雷は高次な信仰の世界に寄与すること絶大であったといえる。

(1) 帝権と対決する神々

雄略天皇が、三諸山の大物主神（雷神）や葛木山の一言主神との対面をなす以前から、人間界の最高の権力者たる帝王が、神々といかに関わりあうかは重大な課題であった。「崇神紀」によれば、七年春二月に、大物主神は倭迹迹日百襲姫命に憑いて「わが子大田田根子命を以て自分を祀れば、国内は平穩となり周辺の諸国

は帰服して来るだろう」と述べ、天皇を心服させている。ここでは、国内の凶作・疫病の危機を切りぬけるために苦慮する崇神帝に対して、大物主神は救世主として臨んでいるのである。また、神功皇后が、新羅侵攻を目指して肥前国松浦郡の地で天神地祇を祀ったことがある。その時、神田を定め儼なの河水を引き水田を潤そうとしたが、溝の工事が迹とどろ驚岡おがに至るや大磐が塞がり、開通を期し難かった。そこで、武内宿禰を召し、劍鏡を捧げて祈ると、雷鳴はげしくその岩を踏み裂いて通水させたという。ここでも、強大なる威力を有する雷神には、皇后の祈りを聞き届け、擁護するという優位性が見受けられる。だが、「雄略紀」七年の天皇は、簪力抜群の栖軽を派遣して、実力を以て宮中に雷神を引見しようとしたわけで、いってみれば帝権の神に対する挑戦といえよう。雄略帝は四年二月にまた葛木山の一言主神とも対決しているが、その様相は記紀両書間では、若干異なっている。即ち、舟ヶ崎正孝氏の精査された如く、①天皇が葛木山に赴く動作が儀礼的行幸か射獵か、②一言主神が天皇の問いに応じて、先に身分を明かすか否か、③天皇をどこに侍送するかなどの相違点があげられる。ここで最も重要なことは、紀では天皇が自分に酷似した相手に「天皇知ニ是神。猶故問曰。何処公也。」と問いかけているが、逆に神から先に名乗ることを強要される。しかし、それ以後は、ともに獲物の鹿を譲りあったり、言葉が丁重を極めたという対等の関係を以て両者が描かれている。これに対して、記では双方矢をつがえ、あわや戦闘かと思わせるが、神の方が先に問いかけられたがために名乗ると、帝が屈服し、武器・百官の衣服献上という形をとり、一言主神の権威が発揚され、紀よりも古態を保持していると推定される。

この一言主神も、志田諱一氏の指摘注5されたように、本書上28において、法力無比の役優婆塞に、金峰山と葛木山との間に橋をかけることを命じられ、手玉にとられている。一方、三諸山の雷

神もまた栖軽の墓標に自由を奪われ、落命の危機に瀕するほど矮小化してゆくが、有時の際には普通の人間を殺すくらいの威力を残藏していたことは、肺臥山の峰に留まった雷の例からも明白だ。また、同じ常陸国の伊福部岳にある石室に伏す雷も、兄より田植のおくれた妹を蹴殺す暴挙に出ている。雌雄の導く積麻でその居場所を知る筋は、三輪山伝承を思わせるが、「イカヅチノフセル石室ニイタリテ、タチヲヌキテ、神雷ヲキラントスルニ、神雷オソレヲノ、キテ、タスカラン事ヲコフ。ネガハクハ、キミガ命ニシタガヒテ、百歳ノノチニイタルマデ、キミガ子孫ノスエニ雷震ノオソレナカラント。是ヲユルシテコロサズ。」〔常陸国風土記〕逸文・『塵袋』第八所収)という発想は、上3の農夫が金杖をふりあげた時、赦しを乞う雷の姿や、泰澄和尚が越後国上山の寺院にて雷を捉え、一命助けるかわりに、水を噴出させ、以後四十里四方にて活動せぬよう申しわたした話型注6にも通ずるものがある。

(2) 寺院の発展に尽力する雷神

ところで、道場法師誕生が、雷神の恵みであったとする筋立ては、一種の申し子譚といってよからうが、その原形ともいべき話がある。それは、大和国平群郡龍田の地名伝説であるが、そこでは、雷が落ちて天上に昇り得ず、そのまま小子となってしまうのである。

龍田といふ事は、むかし此所に雷神落てあがる事をえずして童子となりたりけるを、農夫やしなひて子とせり。比しも夏の初なりけるが、隣村にはふらざれども、此農夫が田のうへに白雨時々そゞぎ、稲花をなし、熟して秋のおさめおもふままにしてけり。其後此童子いとまこひて小龍となりて、天にのぼる。かれが作る田を龍とぞ云けるを、やがて所の名とせり。(和州舊跡幽考)「巻六」龍田)

右の説話で興味深いのは、童子を養育してやった農夫の田のみに慈雨が降り注いだという点である。『靈異記』上25大神高市万侶の

顯彰譚も、農繁期に百姓を用いることを天皇に諫め、日での際には、自分の水田から百姓たちの田に水を与えたため、龍神が感応して、彼の田のみに雨を降らせたと、内容が有しているが、龍田の伝承と酷似している。龍神は水を介して蛇神・雷神と深く関わるものである。元興寺にて「宝曆元年乙亥聖武天皇千年の御忌に南都元興寺にて開帳ありし靈宝の中に古き面あり。其形左のごとし」として示された『南畝秀言』(下)の図は、柳田國男氏が指摘されているように、龍神と雷神の変相であった。ちなみに、大神高市万侶の先祖三輪氏は、三諸山の大物主神の子大田田根子であり、やはり雷神と深い関わりを有していた。

龍田の雷神説話は、雷の童子(小龍)の報恩によって田に降雨を得、道場法師伝も雷の申し子が、怪力を發揮して田に引水し得たのであるが、このように水利と関わる雷神伝説は、各地で語られ、文獻化されているようだ。例えば、大島建彦氏の調査された『録事尊縁起』がそれだ。

頃(は)五月下旬、殊の外雷神轟音の節被表に出、今日の雷神は何ヶ月身病ありと申ければ、其夜白髪翁來て申けるは、我は雷神なるが、今日先生粹察の通我心中に苦痛あり、甚だ難儀いたす間、貴殿之治療何分御頼申とありければ、いかにも承知いたし候とて候様子、其上六ヶ所灸占し、家に伝る明葉翁に遣しければ、大に悦被帰ける。又一七日過來て申様、先生の妙灸神薬にて病忽に平癒致候連、龍起雷論と申二卷の医書を取出し、右御礼として是を差上申候。……以下略……。(仮名は平仮名に統一し濁点を付した。)

以下は次のようである。雷神は、医師に「その他何なりと自分で出来ることは尽力したいから、言って呉れ。」と語りかけると、彼は、「当地の川筋は不定にて、人々は難儀をしているから一定となる様に頼みます。」と希望した。そこで、雷は鋏にて難儀とならぬ所に水道となるべき道筋をつけておくよう指示し、七日後雷鳴とともに川筋を定めたという。また、同氏の紹介された『糟尾大明神縁起』も「後花園院の宝徳二年に、糟尾の性玖法眼が、雷神の

病をなおしてやって、百町の田をうるおしてもらった」という内容のもので、やはり水利関係の伝説である。

次に、飛鳥元興寺における童子の鬼退治であるが、尾張元興寺周辺にも近世期の諸書に類話が存する。尾張元興寺は、考古学上からも飛鳥時代のものであることは確認されている。その位置は、現在の名古屋市中区正木町にあるが、天文年間(西暦約二キロ)の中川区牛立町に移転した。時に古渡の元興寺の地には薬師堂一宇しか残っていないかったという。その牛立の元興寺に、大道法師が妖怪を退治して首尾を切り埋めたが、その塚を尾塚と称するという伝承が存する。また、『張州府志』にも「地藏塚 在三大喜村」。大道法師者、大徳之僧也。葬二千此。牛立村願興寺伝曰、大道法師者願興寺僧、有二脅力一捕二妖鬼」とある。この大道法師を道場法師の訛言とする『尾張志』の説は、俄に信用し難いが、その子孫の力女の伝承を支える地名一女子村が片菰里であることや、後述する如く、近傍の熱田の地に蟠踞する尾張連一族が、雷神信仰を奉じていたことなどの事実から、当地に道場法師伝を支える有力な説話生成基盤を確認し得るのである。

(3) 仏教信仰を支える霹靂の靈木

道場法師が、鬼退治や寺田に引水し得たのは「当知。誠先世強修三能縁一所感之力也。」と景戒は理解していた。即ち、彼の超能力は、直接には雷神の申し子であるのだが、そうした運命を担って誕生すべき因が前世にうえつけられていたというのである。具体的には、彼の父が雷を助けて、楠の舟を作って昇天させてやったためであろうか。ところで、道場法師伝の第四部分ともいえるべき寺田灌水の話には、中野猛氏の指摘された如く、近江国高島郡石橋を舞台にした大井子の大石を水口に据えて注水する類話が存するが、更にこの石橋村が三尾郷と関連深く、その三尾郷から徳道が長谷寺に奉った観音の御仏体となった霹靂の木が流れ出たとす

る言及には興味深いものがある。この流木はたいへんに恐ろしく、その端を切りとった三尾郷の里人の家を焼き、村里に多くの病死者を出す暴威を揮った。更に大和国葛城下郡の出雲大満が、それを当麻村に引いてゆき、仏像にし得ぬうちに死して八十年が経過した。するとその地域でも病人が多発した。そこで人々は長谷川の中に引き棄てて、または三十年が経った。このことを聞いた徳道は、この木には必ず霊力があるに相違ない。十一面観音を作り奉ろうと思っていたが、彼にその資力がなかった。七年間願いを達せんと祈った後に、元明天皇と藤原房前が力を借し、神龜四年に首尾よく完成し得たという。上5大部屋栖野古が、和泉国高脚浜に流れついた霹靂の桶で仏像を作製したとする説話も、これと同型である。そこで屋栖野古が流木を拾うに至った動機は、「敏達天皇之代。和泉国海中有二楽器之音声一。如二笛箏琴箏篳篥等声一。或如二雷振動一。昼鳴夜耀指レ東而流。」という派手なものであった。ただこの部分は、『日本書紀』欽明十四年の「夏五月戊辰朔。河内国言。泉郡茅渟海中。有二梵音一。震響若二雷声一。光彩晃耀如二日色一。」を脚色したものであろう。だが、紀では、不思議に思った天皇が自ら池辺直某に命じて、海に入り正体を求めさせている。ところが『靈異記』では、敏達天皇が、報告した屋栖野古の言葉の信じなかったがために屋栖野古は皇后に再度申し上げ、調査の命をうけている。このことは、彼が、後に推古天皇のもとで大信位を賜わり、僧都に任ぜられて活躍する伏線としての変容と考えて差支えなからう。^{注12}

この仏像が、吉野寺（比蘇寺）に安置され、光を放ったとする所伝は、また『扶桑略記』卷三や『聖徳太子伝暦』の推古三年の記述と食い違っている。即ち、両書によれば、この年の春、土佐南海に毎夜大きく光る物があり、それが雷の如き声を出していた。三十日を経た後、夏四月に淡路島南岸に漂着したが、その大きさは直径一圍、長さ八尺余りで、芳香がたちこめた。島人は香木と

知らずに、薪に交えて燃したので、太子は、この流木は南天竺国南海の産沈水香たることを述べ、「而今陛下興隆積教一、肇造二仏像一。故積梵感レ徳、漂二送此木一。」（『扶桑略記』）と説いた。そこで推古天皇は、百濟の仏工に命じて観世音像を作つて比蘇寺に安置したと伝えている。『日本書紀』の「推古紀」にも、この年に「夏四月。沈水漂二着於淡路嶋一。其大一圍。鳴人不レ知二沈水一。以交レ薪燒二於竈。其烟氣遠薫。則異以献レ之。」と照応する記事が存するが、比蘇寺の仏像云々の記述は存しない。流木が異香を発しつつもその声が雷のようであったとか、梵音や笛箏琴箏篳篥の音が雷鳴と通ずる音を発しているというのは面白い。この木は、雷神の宿る霊木として扱われているが、磯に押し寄せる波の轟が、恰も雷音の如くであることからの発想と考えられる。今日、をちこちの海岸線にそれに纏わる伝説が存するが、遠州灘の波小僧（遠州七不思議の一つ）は、その最たるものだ。

上5と類似発想の伝承をもう一つ紹介しておこう。それは、屋栖野古が流木を拾った高脚浜に隣接した穴師に存する薬師寺にまつわる縁起である。本寺は別に穴師堂とも穴師神宮寺とも称しているが、その所伝によれば、

当寺正平年中記録云。本尊薬師如来光仁天皇宝龜年中自二異域漂来於海中一。州民得之天津浦一。即穴師神傍建草堂安置之。經二年后。又得二柱梁於海中二建二金堂一。故竊殺今尚着二柱梁一。

（『泉州志』）

ここには、雷神は登場してはいないが、既成の仏像と寺院の建材を流木に求める型は、屋栖野古伝の話型と同型といえよう。何れにしても、上5では「海なる雷」―波の轟き―が流木にのりうつり、物部氏の迫害にも耐えぬき、密かに隠匿した仏像は安泰にして、後に比蘇寺にて時々光を放つ霊力を発揮し、仏教がわが国に定着しつつあった播磨期において、その確立に大きな役割を果たすことになるのである。

小子部栖輕に、生前と死後の二度にわたって対決した雷は、最後には彼の墓碑でノックアウトされ、後遺症も癒えぬままに、雄略天皇の恩情にすがりやつの思いで天上界に帰っていった。空なる雷¹³は、起死回生のリターンマッチをも惨敗して失なってしまったのだ。しかし、この雷は、いかに惨^{みじ}であらうとも、具体的に何らの損害や譲歩があったわけではなかった。それが道場法師伝となるや、助命嘆願の代償として雷は申し子を農夫に授ける憂目をみるのである。蛇を首に巻いたまま生まれて来たこの異能な童子は雷の子であり、ここに「地なる雷」は飛鳥元興寺という一寺院のために粉骨粹身してゆく役割を担う。また、屋栖野古伝での「海なる雷」は、楠の流木に宿り、仏像と化して靈力を發揮したのである。『靈異記』における三様の雷が示す局面は意味深い。即ち帝権との対決という段階から寺院への奉仕者として扱われ、更には仏像と化し験力を発現し信仰を深化させ、仏法の本質面と関わってゆくのである。

二、栖輕説話の特色と伝承基盤の発掘

『靈異記』上巻巻頭説話が、小子部栖輕の子孫によって伝承されてきたことは、死後の栖輕を賞讃し尽くし、その忠誠に天皇も感動したと語っている部分からも明白である。また、石田英一郎氏が「桑原考¹⁴」にて、桑の木には特殊な靈能があり、雷をよける力を持つという信仰が顕著で、「昔桑の木に鎌がかかっていたところへ雷が落ち、傷ついで敗亡したので、爾来おそれて桑の木へは落ちぬ、故に雷鳴の時には、桑原々々と唱えるのだ」という伝説を紹介されているが、小子部栖輕が蠶¹⁵を集めよといわれて子供を集めて来たとする「雄略紀」六年の所伝を想起するに、まさにこの雷神説話を伝承するに最も応しい者として栖輕一族を挙げざるを得ないのである。また、栖輕が三諸岳の雷神を捉えたため、その名に雷を賜ったと報ずる『日本書紀』の記事を裏書きするかの

如き記述が、『新撰姓氏録』山城国諸蕃の秦忌寸の項にある。即ち「天皇遣二使小子部雷¹⁶。率二大隅阿多牟人等¹⁷。搜括鳩集。得¹⁸秦民九十二部二万八千六百七十人¹⁹。遂賜²⁰於酒²¹。爰率²²秦民²³。養²⁴蠶織²⁵絹²⁶。」と。小子部連雷²⁷その名こそ、この伝説を彼の末裔たちが伝承しつづけたことを実証してなお余りあるものであった。

(1) 小子部栖輕伝の分析とその解釈

本話を三部構成と解することにより、その読みは格段に深まると思う。第一部は、雄略天皇が大安殿で后と婚合していたところに、栖輕が知らずに入っていた。天皇は恥じ止めた。時に空に雷が鳴ったという個所まで。第二部は、天皇の命で雷を請け奉って宮中に持って来たが、天皇が恐れられたため、落ちた場所に返したところまで。第三部分は、死後の栖輕と雷の対決の場面である。本話は、「雄略紀」の所伝と比べてみるに、もとは第二部のみであったと思われる。そして、『靈異記』説話の方がずっと後世的所産であることも論じたことがある¹⁴。が、その傍証は他にもある。即ち『靈異記』のそれでは、栖輕は落ちた雷を宮中に運ぶに際して神司を呼び譽籠に入れていたし、また雷の岳に返す時も仰山な幣帛を奉っているが、このことは、合理的な対処の仕方をして雷の害を受けることを避けていることを意味する。また、紀の伝では、天皇が雷を正視し得ず逃けているが、本書では、天皇は雷を直視している。更に、紀での、天皇が齋戒せずに雷に逢っていることは、一見雷をものともしない強さを感じさせるが、その実は雷に對する素朴な対面態度を意味しているに他ならない¹⁵。やはり時代が降れば、正面きって堂々と雷を制禦しようとする反面、その威力に害されぬため、儀式や神事を丁重にとり行なっているのである。

さて、それにしても、本話第一部の大安殿での雄略天皇の描写と第二部との繋りは稀薄で不自然な感を免れぬが、実はここに重

大な鍵が内蔵されているのだ。即ち、雷鳴の際に男女が交わりをなすと、落雷するという風習が存するが、そうした民俗信仰を考慮すれば、「天皇恥輟。」と「当於時一而空雷鳴。」との表現が、まさに必然のものとして密着するのである。とすれば、この第一部は、小子部氏一族が第二部を伝承していくうちに、雷を請け奉った栖軽の行為を必然のものとするために、付加したと考えられる。そこには、帝の個室にまで入ってゆくことの可能な信頼厚い肺腑の侍者栖軽像を描くことも意識されていたと思う。かく考えることにより、第二部で雷を呼び寄せる力を帯びた帝と、栖軽が招雷の誓約をする意味合いも素直に理解されるのである。

(2) 雷神信仰を奉じて群居する飛鳥の諸氏

雄略天皇に忠誠を尽くした小子部栖軽一族が、泊瀬朝倉宮の近傍に群居していたことは当然であり、その氏神は十市郡の百濟川のほとりにある子部神社ではないかといわれている。たしかに現在当社には、小子部栖軽やその祖たる神八井耳命を祀っているが、それは、その名の示す通り子部一族の氏神ではなかったかと推測される。子部氏とは、『新撰姓氏録』右京神別下の項に「子部 火明命五世孫建刀米命之後也。」とある。小子部氏は神八井耳命を祖神とするのであるから、両氏族は血縁関係はないことになる。神八井耳命とは、系譜的には神武天皇の第三子である。「綏靖紀」によれば、父神武死して後、諒闇の間に庶兄の手研耳命は勝手氣儘に振舞い、二人の弟を殺害しようとした。そこで、二人は逆に庶兄を殺そうと弓矢を携え、片丘の地室に侵入するが、兄の神八井耳命は手足が震えて矢を放ち得なかった。そこで弟が、手研耳命を二矢で斃した。神八井耳命は、「吾是乃兄。而懦弱不能致果。今汝特挺神武。自誅三元惡」。宜哉乎。汝之光臨天位」。以承三皇祖之業」。吾当下為三汝輔之奉典神祇上者。」と述べ皇位を弟の神淳名川耳尊に譲ったのである。そして、彼のもとからは多臣氏が起

こり、その子孫は『古事記』によれば、意富臣・小子部連・坂合部連・火君・大分君・阿蘇君・筑紫三家連・雀部臣・雀部造・小長谷造・都祁直・伊余国造・科野国造・道奥石城国造・常道仲国造・長狭国造・伊勢船木直・尾張丹羽臣・島田臣の多くを数える。この中で、小子部連が（雄略紀）六年）蠶と子とをとり違えたのを天皇は笑われて「汝自ら養え」と宣い、姓を賜いて小子部と称したという由来譚がある。多臣からの分化である。太田亮氏は多臣について「大和国十市郡に飢富郷あり、而して同村に神名式所載多坐弥志理都比古神社鎮座するあれば、此の地より発祥したるが如きも……以下略……」と言及されていることから、小子部連一族が飢富郷一帯に群居していたことは確実である。『多神宮注進状』においても、「葛城高岳宮御宇。神淳名川耳天皇諡曰綏靖。為人王二代。御世二年辛巳之歲。春中皇弟神八井耳命。自三帝宮一以降居於当国春日県。造三营天宅。一塩三梅国政。一斯蓋起三立神籬磐境。一祭三礼皇祖天神。一陳三幣物。一啓三祝詞。」と神八井耳命が当地に本拠を置く旨を述べている。更に、小子部栖軽についても「及三千泊瀬朝倉宮御宇大泊瀬幼武天皇。一詔六世孫螺蠶或歟子清眼弟被遣三諸国一取三斂蠶兒。一誤聚三小子三奉三貢之一。天皇咲以三小子一賜三螺蠶。一詔曰汝宜三自養。一干レ時螺蠶即養三小子於高辺。一仍賜為三小子部連。一此小子等及三壯。令レ住レ彼多郷。一俗号三其処三云三小子部里。一即位九年乙巳初春。天皇依三靈夢。一詔三螺蠶三奉三祭三祀皇枝彦日根兩神於子部里。一今天子部神社是也。」と述べ、子部との関わりと子部神社の由来につき詳述している。この社は、『延喜式』神名帳にも「子部神社二座」とあり、旧平野村（現橿原市）大字飯高に存する神社がそれであり、当地が往古の子部里であろう。ところが、この子部神社より未申の方角半町ほどの位置に、螺蠶神社があると『大和志料』は報じている。『多神宮注進状裏書』によれば、「螺蠶神社一座。雷螺蠶靈。亦云三雷神。一是即小子部連遠祖在三子部里。一未レ預三官幣。」とあり、『大和志料』では「今俗ニ之

ヲ「ココベ」ト称スルハ即チ「チヒサコベ」ノ転訛ナルベシ」と説明を加えている。また神社明細帳によれば、本社は「無格社子部神社、祭神小子部命、由緒不詳、延喜式内」と記載してあることから、子部神社と極めて密接な関係を持つ神社に相違あるまい。ところで、先の『多神宮注進状』によれば、子部里とは、小子部氏（子部氏）の祖神は前述の如く「火明命五世孫建斗米命之後也。」である。とすれば小子部氏（子部氏）が育てた子の子部と火明命を祖神とせる子部氏とは異なったものであろうか。筆者は、結論的にいえば『多神宮注進状』に言及された子部里の伝承が、内容的に事実であろうがなからうが、存在していた事実に着目したいと思う。子部氏と小子部氏との名称の類似性と両者がともに雷神信仰を奉じていたとすることから、はたまた同一地域に雑居していたことなどの諸条件が重なりあい、子部神社は雷神を以て鳴り響き、子部は栖輕の育てた人々だとする伝承のもとに、二氏族の融合が行なわれたのではなからうか。ただ、神社のみは、小子部氏の栖輕を祀る神社と子部氏本来の神社とがそのままに残されたものと思われる。だが、そのように考えた場合、子部神社に子部氏の祖神たちが祭神となっていない点が疑問点として残る。『五郡神社記』によれば意富郷村平森に在る子部神社の祭神は「社家者説曰。子部神社二座。天之穗日命。天津彦根命。亦曰三天子部神社。為三天神。」と述べるが如くであり、火明命系統の名はない。だが、「大安寺縁起并流記資財帳」によって明らか通り本神社は雷神の性格により百済大寺を屢々焼いているのだから、景戒が道場法師系説話群を入手した奈良朝末期の頃には、小子部栖輕一族によって両神社とも管理されており、両氏の融合が行なわれていたと考えたい。

さて、子部氏の尾張氏より分化したのは、火明命五世孫建斗米命の時であるが、その子建多乎利の時に湯母竹田連も分流した。彼らの出自は、『新撰姓氏録』左京神別下において「火明命五世孫

建斗米命之男武田折命。景行天皇御世。擬_レ殖賜_レ田。夜宿之間。菌生_二其田_一。天皇聞食而賜_二姓菌田連_一。後改爲_二湯母竹田連_一。」と報じている。建斗米命が建多乎利命を儲けた時に、景行天皇が産湯料として湯母に賜った田に、一夜で菌が生じたというのだ。また、竹田川辺連は同書に「同命（火明命）五世之後也。仁徳天皇御世。大和国十市郡刑坂川之辺有_二竹田神社_一。因_レ以_レ爲_二氏神_一。同居住焉。緑竹大美。供_二御箸竹_一。因_レ茲賜_二竹田川辺連_一。」とも記述している。刑坂川（竹田川（寺川））のほとりに湯母竹田連は竹田神社を構えていたが、仁徳天皇の御世になってから緑の美しい竹を竹箸用に献じたがため、竹田川辺連を賜ったのである。そして、この一族は、寺川べりの東竹田から子部神社の存する飯高の近接地、西竹田あたりまで群落をなしていたと思われる。彼らが、川辺郷で管理していた竹田神社には天孫国照火明命を祀り、その神像は竹箸であったという事実は、系譜上当然なことと首肯されるが、別に雷神をも信仰していたことは注目される。というのは、同じ郷内に川辺連が祝部として管理する八剣神社があったからだ。祭神は出雲速蛇建雄神命、神物は横刀である。『大和志料』によれば、この横刀は天叢雲神剣であるというから、後述する熱田神宮にまつわる雷神信仰と類似なものがここにも存していたといえる。

また、子部氏と同じく建斗米命から分派した笛吹連は、葛城の地で葛城坐火雷神社二座を笛吹山にて信仰していた。即ち一座は葛城坐火雷神・天香語山命などを主神として祀り、他の一座には笛吹明神を祀っていることから、尾張連の祖には、もともと雷神信仰が息づいていたのではなからうか。この問題を更に掘り下げてみよう。そもそも、第二代天香語山命（一名高倉下）のもとに、部_{（部）}靈_{（霊）}という霊剣を降した神は、武甕雷神であった。この神は、伊弉諾尊が軻遇突智を斬った剣の鏢よりしたたる血から誕生した燼速日命の子孫であり、雷神の性格を備えていた。したがっ

て、武甕雷神から恰も雷が下るような形で剣を託された天香語山命の子孫に雷神信仰が定着していったことは充分考えられることである。同じ頃、八咫鳥となって皇軍を導いたのは、賀茂建角身命であり、いわば雷神の先導という事態を考慮するに、皇軍の魔睡を醒ます霊剣を届けた天香語山命も、雷神の信仰と深く関わっていたことだろう。

次に、尾張連祖から分化した川辺連に対して、異系譜の川辺臣がどういふ関係にあるかが問題となる。『新撰姓氏録』右京皇別によれば、川辺臣の末裔川辺朝臣は「武内宿禰四世孫宗我宿禰之後也。」という。太田亮氏は「これも川辺連と同様、大和十市郡川辺より起りしか。」と推定されているが、この氏人も雷神と関係深い記事が見受けられる。「推古紀」によれば、二十六年に河辺臣某が船の材を求めため安芸国に派遣された。彼は最適と思う木を見つけたが、それは霹靂の木であった。人々がとめるのも聞かず、皇命に雷だつて逆らい得ぬ筈だと述べ人夫たちに切らせた。雷はどうしようもなく、遂に小魚となって木に挟り焼かれてしまったというのだ。また、延暦廿二年七月二十六日に、飛鳥元興寺の中門の持国天を祀った柵内（註）にいる河辺朝臣今子は、虐を患つて命旦夕に迫っているが、角弓を手にした藁又神王来たりて平癒せしめる恩恵に浴している。この藁又神は、羅刹や毘沙門天と北方を守護するが、雷神をも駆使し得るのである。川辺臣（朝臣）が蘇我氏から分派したのは、前述の如く『新撰姓氏録』では武内宿禰四世の孫、宗我宿禰の時といひ、『古事記』では蘇我石川宿禰がその祖と伝えている。建内宿禰は、前述の如くかつて神功皇后の命を受けて、神に祈り雷神の助けで水田に灌水し得たこともあり、そうした影響を受けていることも考慮されるが、やはり近接した土地に雑居し、同じ川辺氏を称していることから、川辺臣に雷神信仰が浸潤していったものと解したい。

以上、煩雑な考証を展開して来たが、この諸考証を通して、十市郡子部里（飯高）一帯に本拠を有する小子部連・子部氏や、川辺郷（東竹田）を中心に群居する川辺連と川辺臣が、信仰上様々に影響し

あつて、雷神信仰を深めてゆく状況の一端を探り得たと思う。中でも、雷神制庄のチャンピオンは、雄略天皇から「雷」の名を賜つた小子部栖輕一族であつただろう。したがつて、もともと雷神信仰を有していたと思われる子部氏が、その氏神（子部神社）に栖輕を祀つたのは、ごく自然な趨勢であつた。そして、子部氏の起源を、栖輕が育てた子供たちに求めた伝承が生じたのも、両氏の間力関係のなせるわざであつた。ここに、小子部連によって統率された子部氏のイメージが形成されたのである。したがつて、雷神を駆使する誉れ高い子部神社の祭神栖輕が、神社の聖域を侵犯し、樹木を伐りとりて建立された百濟大寺を、祟りで屢々焼いたり、移建後の大官大寺のみならず、平城京の大安寺に至つても怨火を鎮めず、道慈律師を畏怖せしめたのも、当然の帰結であつた。

三、道場法師の出自と雷神信仰

道場法師が、いかなる素姓の人であるかは現在のところ全く論証困難で、殆ど手掛りらしいものはない。だが、『日本靈異記』上巻冒頭部における道場法師系の説話配列を眺めると、小子部栖輕（大和）・三野狐（美濃）・道場法師（尾張）となるが、この三者を結ぶ必然的な系をたぐることに、かすかながら解決の糸口をつかんでみたいと思う。以下に展開する所論は、極めて臆測に満ちたもので、多くの問題点を有しているが、一試論として提出してみよう。

(1) 尾張連祖の美濃国への進出

小子部氏が、子部氏を殆んど統合した形で、子部里にて雷神信仰を奉じていたことは、前章で考察したところであるが、その子部氏の祖である尾張連氏の歴史を概観するところから立論を始めた大族であつた。いまその地から尾張国に移住した時は定かではないが、太田亮氏の調査によれば、崇神朝の頃だろうと推測されている。尾張連の祖たちは、七代建諸隅命のあたりまで、多く

たわけだが、その出自は、尾張連の流れに求められるのではなからうか。その体が小型であったとする道場法師の孫娘などの発想は、その祖先建稲種命一族が、小碓命（日本武尊）と深い関係を有していることの反映とみるのは、穿ちすぎであろうか。このように考えて来ると、大碓命が景行天皇の意に反して美濃国造神骨の娘兄遠子・弟遠子を妻としていたことから、大型力女の美濃国系説話の背景に、その一族の存在を考慮し得るかと思うが、やはり臆測にすぎよう。それよりも、同族の八坂入彦命の子で、美濃国に居た八坂入媛や弟媛の周辺か、或いは倭得玉彦命の子息弟彦命のまわりにその基盤を求めるのが穏当であろう。とくに後者は、早くから尾張国愛智郡田子地方に勢力を及ぼしていたのであるから、それと隣接する熱田に群居していた建稲種命の子孫が、美濃国の弟彦命の子孫に対抗して、雷神の霊力を継承する道場法師伝や力女説話を、尾張元興寺において作りあげたものではなからうか。^{註25。}

(3) 尾張元興寺における道場法師系説話の形成

飛鳥元興寺においては、小子部・子部氏の奉ずる雷神信仰に着目し、雷を屈伏させた栖軽伝を最初に筆録し、次に同じ雷神関係の申し子という観点から道場法師伝を記録することにより、子部神社の雷神を寺院の下僕として駆使する道を開こうとした。恐らく顕録の簿には、この両説話は、相前後して記載されていたと思われる。これに先だって、同じことが尾張元興寺でも行なわれていたのではなからうか。即ち、雷神から子を授かり、それが大力の持主で、飛鳥の本寺（元興寺）にて修行すべく上京し、鬼退治をしたというような説話を、熱田神宮の周辺で雷神信仰を弘めていた尾張連一族を背景に、寺院の僧が敷衍して伝承していたと考えられる。ちなみに、名古屋市鶴舞中央図書館蔵の「明治初古渡附近図」^{註24}を見ると、佐屋街道に沿って明示された元興寺の隣りに、字クハゴシ畑があるが、伝承上雷と農夫との対決の場を思わせる

地名で興味深い。尾張元興寺の上3（原形）の発想者は、やはり尾張連出身の僧であったと思う。彼らは雷神の申し子の力の偉大なることを讃え、美濃国大野郡にて在地神（狐）の信仰を奉ずる同族に対して、雷神を擁する優位性を具体化して、中4の力女争いにて圧倒的強さを発揮する筋書を形成したのである。多分、上2は、尾張元興寺僧が、狐直を名乗る集団の伝承を入手して、そのまま記載したものが根幹をなしており、中4・中27の原型は、同寺にて作成され語られていたものと思う。美濃在住の弟彦命の子孫も雷神信仰と全く無関係ではなかったが、もはや彼らの意識の彼方にそれは薄れ去り、新たに在地の信仰がその精神的支柱をなしていた。それに対して、熱田神宮を中心として、天叢雲剣を奉ずる尾張連の末裔たちの脳裏には、雷神信仰が根強く息づいており、それが美濃狐の子孫（力女）を圧倒する伝承を生み育てていったのである。

上2・上3・中4・中27の原形が飛鳥元興寺に流入した時に、同寺の住僧が上1の原形栖軽伝承を道場法師伝と関連つけて顕録の簿に記載し得たのは、彼によってこの二大人物が同族意識をもって把握されていたからであろう。つまり、小子部連と子部は子部神社を中心に統合されたものとして蟠踞しており、栖軽は雷神を駆使するエースであった。だが、神八井耳命を祖とする小子部氏は、前述の如く子部氏と一体化し雑居して雷神を奉じていたため、系譜的には子部神社にて雷神を信仰していた子部氏の本家である尾張連祖へと組みこまれて考えられていた時期があったのではなからうか。とすれば、片や葛城地方に本拠を居く建多乎利に関わる人物であり、他方は尾張国熱田地方に群居する建稲種命の流れを汲む人物であることになる。かく推測することにより、小子部栖軽から道場法師への有機的つながりの糸を、はじめてわれわれは一つの視野の中に捉えることが可能となったのである。

四、雷神説話の導入と飛鳥元興寺

最後に、小子部栖輕や道場法師にまつわる説話を、飛鳥元興寺が積極的に取り入れた理由につき考えてみたい。それは百濟大寺の建立とそれをめぐる飛鳥元興寺側の拮抗意識に求め得ると思われる。

(1) 百濟大寺の建立と子部神社の怨火

百濟大寺の着工の時と場所は、『日本書紀』舒明天皇十一年秋七月に「詔曰。今年造大宮及大寺。則以百濟川側一為宮処。一為西民造宮。東民作寺。便以書直縣。為大匠。」とあって明白である。つまり、百濟川（曾我川）のほとりの百濟の地に、宮殿を築くのと併行して寺院建立が企図されたのだ。百濟大寺を設けるに至る経緯は、天平十九年成立の『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』によって、その概略を知り得る。それによれば、聖徳太子は、推古天皇の命を受けて病床を訪れた田村皇子に、熊燦精舎を大寺として将来に遺してほしいと希望を託する。またその三日後に私的に訪問した皇子に再度熊燦寺を託し三寶の法を永く伝えるよう述べている。その後、推古天皇も崩御される時に、皇子に聖徳太子の遺志を認め、宝位と熊燦寺とを与えられた。幾多の紆余曲折を経て帝位に就いた舒明天皇は、その十一年春二月に「於百濟川側一。子部社乎切排而。院寺家建九重塔一。入賜三百戸封一号曰百濟大寺一。」とあり、紀の七月着工よりも五箇月早くなっている。『大安寺碑文』も、同じく二月となっている。それが、十二月には「是月。於百濟川側一。建九重塔一。」（『日本書紀』）とあり、その規模は金堂に石の鷗尾をのせ、九重塔が聳立し、三百戸の封邑と良田二百町及び種々の財宝を所蔵し、惠衆学侶を寺においたという。ところが、完成後間もなく寺の主要な建物が焼けた。『大安寺縁起』は、このことをただ「爾時造寺司等多伐社樹一。社神悉怒放火焼寺。」と報ずるのみで神社名を記していないが、『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』では、前述の如く子部社

社と明記している。また、『大安寺碑文』でも「院之側。先有子部神社一。有司便斫社樹一。交構三堂塔一。社神大怒。飛燬焚寺。」と詳記しているし、『三寶經詞』巻中でも、道慈律師の言として「此寺はじめやけゆる事、高市郡の子部の明神の社の木をきれるによりてなり。此神は雷の神なれば、いかりの心にはのほを出せるなり。」と述べている。更には、宮廷正史『三代実録』（元慶四年十月）にまで「子部大神在三寺近側一。含怨屢燒三堂塔一。」と記載されていることからして、子部神社が百濟大寺の関係は、天下周知のことであった。古来このように、寺院が建立される際に、何らかの形で障害が起きる時は、妖言浮説が飛びかうものだ。例えば、道鏡が西大寺に八角七重塔を築造した時、西塔が震動したため、その原因を祈禱により糾すと、近江国滋賀郡小野社の木を伐つて塔の材としたので祟ったというのである。

さて、百濟大寺の規模は飛鳥元興寺にはほぼ匹敵するものを目指して作られたと推定される。大化元年（六四五）には十師が発表されたが、その一人恵妙は百濟大寺の寺主となった。だが、この寺は長つづきしなかった。天武天皇は、二年十二月に、小紫美濃王及び小錦下紀臣訶多麻呂に命じて高市大寺を作りはじめた。その理由は、『大安寺碑文』によればやはり子部神社の怨火のためであった。百濟大寺を舒明十一年に起工してから三十四年後のことである。子部神社の怨火は、その後も一向に収まらなかつたとみえ、天平初年の頃聖武天皇のもとで大安寺を修造することになった道慈律師は、同碑文で「法師以為、不滅二妖火一功業難成。於是即上表。請為三寺業一。毎年四月設二般若会一。」とまでいっている。まさに同神社の雷神の威力は強力であったわけだ。勿論、道慈が子部神社の怨火を強調した背後には、般若会を大安寺の看板行事として定着させたい意志が強く働いていた。ゆえに道慈のいう雷神の暴威は割引いて考えるべきだが、とにかくこの怪火のことは世間に広く知れわたるまでになっていたのである。道慈は、大化元年に十禅師に選ばれた飛鳥元興寺僧福亮と同郷の人で、福亮の子智蔵に三論宗を学んでいる。福亮は留学して唐

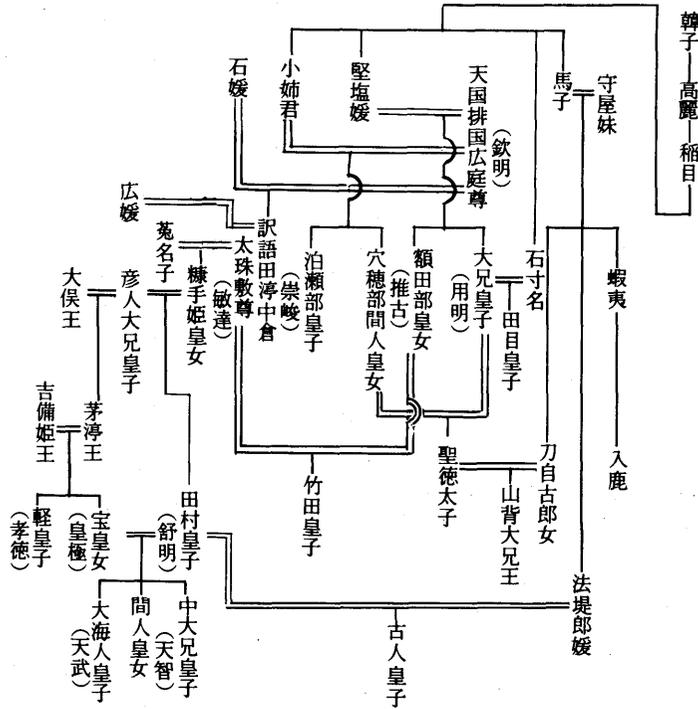
土で嘉祥に学んでいるが、道慈も大宝元年（七〇一）に入唐し、養老二年（七一八）に帰国して高市大寺に入っている。福亮の名は、斎明四年に鎌足公が維摩会を創始したことで広く知られている。『三宝絵詞』巻中の山階寺維摩会の起源によれば、鎌足が山城国宇治郡山階村陶原の家に在った時、病にかかり出仕し得なかった。すると百済尼がその家に至り、「維摩詰の形をあらはして、維摩経を読めば即やみぬ。」と告げる。その通りにすると病癒えたので、その後年ごとにその行事を行なうようになったという。『扶桑略記』巻四によれば、その時は斉明二年で尼の名は法明と伝えている。そして、同三年に「於山階陶原」……中略……始立三精舎。乃設二齋会。是則維摩会始也。」と述べ更に翌四年に「中臣鎌子。於山科陶原家。屈三請吳僧元興寺福領法師。後任為二其講匠。甫演二維摩経奥旨。其後天下高才海内碩学相撰。諸用如レ此。」と報じ、維摩会の定着に福亮が中心的役割を果たしていたのである。道慈は、そうした福亮の活動を具に見てから留学体験をしているのだが、帰国後、福亮がよく語っていた子部神社の雷神がなせる妖火の噂を利用して、『大安寺碑文』という聖武天皇への奏言をなしたのであろう。福亮は熊凝の額田郷出身であり、それがため、元興寺僧となつてからも熊凝精舎を継承した百済大寺建立に強い関心（警戒心）を抱いていた。だから子部神社の怨火の噂を耳にするや、飛鳥元興寺では積極的に雷神信仰を導入して、寺の発展に寄与する伝承を希求してゆくことになったのである。大般若経が、雷をはじめとする怨霊に効果的な験力を發揮していたことについては、插曲「葵の上」などの諸例をもつて論ずる橋恭堂氏の研究に詳しいが、中でも承和三年十二月六日の「是日勅頒者霹靂千四天王寺。破壞塔廟。恐是咎徵。宜令下東大・新築・興福・元興・大安・四天王等十九寺。三日三夜。転読大般若経。一番不絶音。」（『統日本後紀』）という勅命は、子部神社の祟火を慰撫して消去しようとした考えと同様で、興味深い。

(2) 蘇我氏の動向と飛鳥元興寺住僧の意識

次に、怪火に焼失した百済大寺のことを憂慮しつつ崩御された舒明天皇の末年から、その後を継いで帝位についた皇極天皇初年にかけての蘇我氏をめぐる政治状況の中で、修復し重要度を増して来た同寺の意味を、主として飛鳥元興寺の側から眺めてみよう。推古天皇亡き後に、遺詔をめぐって山背大兄王と田村皇子の両極の側にあつた群臣は、争い対立する。蘇我蝦夷にとつては、前者は馬子の娘刀自古郎女を母としており、後者は同じく馬子の娘法提郎媛を妻としていたことから、どちらを立てても濃い姻戚関係を保ち得た筈であつた。が、聖徳太子の存在を敬遠して、田村皇子擁立に踏みきつた。そして大伴鯨連らの根まわしで、強引に即位させた。舒明天皇がそれである。その治世は、二年八月に犬上御田歙らを唐に派遣するなどして順調な執政であつたが、八年六月に宮殿（岡本宮）が焼失したため田中宮に遷った。そして、十一年になると、百済川（曾我川）べりの地百済に百済宮と百済大寺の造営をはじめたのである。門脇禎二氏は、この百済大寺の建立につき「深く蘇我氏の血脈につながる推古女帝・聖徳太子の遺願にもとづく」とされた百済大寺の造営は、むしろ、蘇我氏の人びとに対する舒明天皇の配慮であつたかも知れないのである。しかし、……中略……百済大寺は、莫大な資財と広汎な徵発民を駆使した大国家事業とし、国の「大寺」として建造されたのであつた。しかもその大寺は、石鷗尾をのせる金堂、九重塔、そのみごとな結構を知つて、蘇我本宗家の人びとが快よかつたはずはないのである。」と論評されている。

百済大寺の妖火を気にしつつ、十三年十月に舒明天皇は世を去つた。後継者としては、先に蘇我氏に押えられた山背大兄王と馬子の娘法提郎媛と舒明帝との間に生まれた古人皇子、更には、舒明帝を父、宝皇女を母とせる中大兄皇子の三者が鼎立し、その決着がつかないため、応急の処置として宝皇女が皇極天皇として即位した。蘇我氏にとつては、ゆきがかり上、山背大兄王は勿論のこと、姻戚関係の薄い中大兄皇子が即位しても困るわけでは、当 faced 面女帝擁立も、やむを得なかつたのであろう。しかし、宝皇女が

表III 蘇我氏と帝権の推移



即位したことは、その弟輕皇子か子息の中大兄皇子に政権が移行する可能性への道が開かれたのである。皇極天皇は、元年九月に入るや百済大寺の造営を命じ、更に新宮殿を十二月までという期限つきで建設することを命じている。そして、その工事責任者として阿倍倉橋麿と穂積百足が任命されている。この人事も、蘇我氏にとっては面白からざるものであった。門脇氏は更に「阿倍倉橋麿は内麿ともいい、周知のように「大化改新」政権の大臣に就いたとされる当時の宮廷の長老的人物であった。穂積百足、穂積氏は物部氏系同族であった。ことここに至れば、百済大寺の造営が、大臣蘇我毛人（蝦夷）とは別のところでおすすめられてい

たことは、いよいよ明白になったといえるだろう。」と重大な指摘をされている。たしかに阿倍倉橋麿は、大化改新後の政権にて左大臣の要職にあり、大化五年三月十七日に死去した時には、天皇をはじめ皇祖母尊（皇極）や中大兄皇子などみな哀哭したというほどの人物で、娘も孝徳天皇に召され、有間皇子を儲けてもいた。また、穂積臣は「崇神紀」七年八月条などには、大水口宿禰の子孫と見えているし、大水口宿禰は「新撰姓氏録」右京神別上の采女朝臣の項に「神饒速日命六世孫」と報じている。したがって、物部氏と同祖である。百足は、蘇我氏の権勢の象徴であった飛鳥元興寺を凌駕する百済大寺の建立に、専心尽力したことと思われる。百済宮で夫舒明天皇の死を迎えた宝皇女は、翌年の一月十五日に皇極帝として即位した。九月に至り新宮殿を急遽年内に完成させるため、東は遠江国、西は安芸国の範圍内で造営の工夫を微発したが、とても竣成し得ぬため、十二月二十一日に小懇田宮に遷られた。そして、翌二年四月二十八日に新宮飛鳥板蓋宮に遷都された。したがって、百済大寺の建造も滞りがちであったと推測される。また、その後も怪火に見舞われたがため、天武天皇が移転を命じたことは、既に言及した。このことを裏書するかの如く、皇極天皇が百済大寺の復興を命じた頃から、『日本書紀』には異様なまでに天然現象とくに雷の跳梁ぶりが列記されている。即ち元年「十一月二日大雨ふり雷鳴る。五日雷夜半に一たび西北の角に鳴る。八日雷五たび西方の角に鳴る。十三日雷一たび北方に鳴りて風おこる。十二月三日に雷五たび昼鳴り二たび夜鳴る。二十日雷三たび東北の角に鳴る。遡って九日雷二たび東に鳴りて風吹き雨降る。二十三日に雷一たび夜鳴る。」というように異常に活発な活動ぶりである。また十月八日と九日及び二十四日には地震があり、百済大寺修復期の天と地は騒がしかった。この異様な自然界とくに天界の異変は、舒明朝の八年六月に岡本宮の焼けた頃からじまじる。即ちその翌九年二月二十三日に大星が東から西に雷のような音を発して流れた時に、当時唐土帰りの最高の知識人であった僧暁が「非三流星。是天狗也。其吠声似雷耳。」と語った話は有名だ。更に十一年正月二十五日に長く尾をひいた星が西北

に見えたが、やはり爰は「彗星也。見則飢之。」と語っている。そして、十一年七月に百済大寺創建に舒明天皇が着手されるのであるが、その動機の一つに、舒明四年八月に帰朝した留学僧旻の進言があったのではなからうか。即ち、新しい治政を扶ける寺院建立の必要性を、この国際的感覚を身につけて帰国した碩学は痛感したのではあるまいか。聖徳太子や推古天皇の遺志を継いだといわれながらも、即位後十一年間も放置しておいた新しい寺院の開設が、ここに至って実行に移された事情は、かく考えることによつてはじめて理解される。

百済大寺建立の地が、百済川の流域に選定されたことも意味深い。飛鳥元興寺が、蘇我氏や狭手彦流の大伴氏とのつながりでも、高句麗様式を取り入れ、百済僧慧聰とともに高句麗僧慧慈が住み、また推古十三年四月に鞍作鳥に丈六の仏像を作らることを命じた時、高句麗の大興王はそれを聞き黄金三百兩を貢上している。この像は翌年四月八日に、飛鳥元興寺の金堂に安置されている。こうした高句麗要素の濃厚なこの寺に対して、百済大寺はその名の示す如く百済からの帰化人の集住する地域に、主として彼ら百済系の技術によって建立された寺院であり、それが皇極天皇の時代に入るや、蘇我氏とは縁遠いところで造営・修復が進められていたと思われる。むろん蘇我氏の権勢は、皇極朝に入ってからも強大で、「皇極紀」元年の記事に、「以三蘇我臣蝦夷一、為二大臣如レ故大臣兒入鹿鞍作。自執二国政一。威勝二於父一。由レ是盜賊恐懼。路不レ捨遺。」とある。しかし、皇極天皇の即位した元年から二年にかけて、蘇我氏の動向には何か焦りに似たぎこちなさがある。それは、皇位の行方を思い、急速に不安感にとらわれ、天皇家を凌駕するような行方を敢行したと解されるむきがある。例の八脩の儀を祖廟葛城の高宮で行なったり、今來の地に雙墓（大陵と小陵）を上宮の乳部の民を用いて築き、春米女王を激怒させたのはこの時のことである。

ところが、蘇我蝦夷の権威を決定的にそこねた事件が、元年七月下旬に起こった。即ち同月二十七日に、百済大寺の南庭で行なわれた蝦夷自らの雨乞いがそれである。仏菩薩と四天王像を蔽飾

し、僧たちに大雲經を読ませ、自らも香鑪をとり、香を焚いて発願したところ、次の日に小雨があった程度で、二十九日には切りあげてしまった。そこで、八月一日に天皇が南淵の河上で、四方を拝して天に祈るや、五日間雷とともに大雨が降ったという。百済大寺では、蝦夷の祈りが雷神（龍神）に届かず、その体面を失墜したのである。こうした有力なライバル百済大寺の出現に対して、蘇我氏の氏寺ともいふべき飛鳥元興寺の側は、予想外に対抗意識を抱いていったことだろう。したがって、時々勃発した火事、それをめぐる子部神社の怪火の噂などに極めて敏感に反応したに相違ない。前述したように、百済大寺の前身熊凝精舎があった地の出身僧福亮が、大化元年の頃飛鳥元興寺に居たため、その怪火について深い関心が払われることになったとも考えられる。また天体現象に新知識を持つ留学僧旻がこの時同寺の寺主であったことも、寺中に雷神信仰熱が高まる一助となったかも知れぬ。かくして、百済大寺が子部神社の雷火に悩まされていた時に、飛鳥元興寺側では、進んで子部神社に祀られた雷神（栖軽）を信仰上の味方にひき入れ、寺院の発展に尽力させようとした。そこで、まず雷神を制圧した栖軽の伝承（上1原形）を寺に備えてある頭録の簿に収録し、ついで尾張元興寺（支院）で伝承されていた道場法師関係説話群（上2・上3・中4・中27各原形）をも取り入れて両者を結びつけ、帝権対雷神の闘争（上1原形）のテーマを仏法対雷神の対峙に置きかえ、雷神を飛鳥元興寺の発展に尽力する下僕下僕の存在として意味づけようとしたのである。『日本靈異記』の冒頭部分や『日本感靈録』に、多くの同寺に関わる雷神関係説話が収録されていることは、いかに百済大寺に対する子部神社の雷神の報復攻撃を、飛鳥元興寺僧たちが強く意識していたかの証左といえる。

結びにかえて

以上、小子部栖軽伝承（上1原形）が、子部神社周辺にて語られて来た背景と、道場法師の出自につき、臆測を重ねて推論を展開して来た。もとより道場法師が尾張連出身であるという直接的

証拠は何もない。ただ、愛智郡の熱田地方から北方の片蔭里にかけて集住していた雷神信仰を奉ずるこの一族の末裔と考えれば、『靈異記』上巻冒頭部の構造がスムーズに説明つくのである。また、飛鳥元興寺が、何ゆえに栖軽や道場法師の雷神説話をかくも熱心に寺中に取り入れたのか。それは、新しくライバルとして登場して来た百済大寺の繁栄を何よりも恐れていた彼らが、それを阻害したと喧伝された雷神の力に親近感を抱いたからであろう。

最後に、景戒が『靈異記』の上巻冒頭部に道場法師説話群を配列した理由が問題となる。三巻の原撰を完了した時、景戒は、八木毅氏が推論されたように、上巻部の分量の少なさが気になったことだろう。そこで、冒頭部に収録すべき仏教受容期の説話を探索したのである。聖徳太子―大部屋栖野古という主従関係にある人物で開始されていたと思われる原上巻のその巻頭部の前に、栖軽―三野狐―道場法師という系譜的繋りが、子部氏を介して考慮される説話群を、付加することに踏みきった最大の理由は、それらが飛鳥元興寺で管理されていたからである。同寺は、景戒と近い関係にある、大伴狭手彦の末裔が出入している寺で、当然彼は親愛感を持っていたからだ。そして、『海なる雷』の宿る霊木で仏像を作った屋栖野古伝の前提部に置く説話として、『空なる雷』と『地なる雷』を語る栖軽・道場法師伝こそ最適な説話と考えたことだろう。更に、中4・中27の原形たる力女譚と、数代を隔てて呼応する三野狐・道場法師伝は、因果応報の実証例として、巻頭部を飾るに値する説話と編者の眼に映じたと思われる。また、小子部栖軽が冒頭に置かれたのは、彼が子部神社の祭神として、百済大寺を時々雷火で燃やし、結果的に平城京に大安寺が建立される頃まで飛鳥元興寺の優位性が守られたことを好感した同寺住僧の話に、少なからず景戒も共鳴したためではなからうか。

注1 飛鳥寺建立・坪井清足氏「古代の日本」・五・近畿所収（昭和四十五年一月・角川書店）
 注2 拙稿「日本靈異記」冒頭部の構成と景戒・日本文学・第二十四巻第六号・昭和五十年六月。

注3 「日本書紀」神功皇后即位前紀（仲哀天皇九年条）
 注4 一言主伝承からみた雄略天皇の王権的属性・日本歴史・百七十三号・昭和三十七年十月。
 注5 日本靈異記と神祇信仰・茨城キリスト教大教大紀要・第八号・昭和五十年三月。寺川真知夫氏も、本書における雷の画数化に触れ、固有神の衰微につき考察し、下24をもとに「神は仏道を妨げた悪報故に転生する忌むべき身の一つ」と考えた景戒の思想に言及されている（『捉雷録』の仏教の意味・鳥田勇雄先生退官記念 ことばの論文集・昭和五十年三月）。
 注6 「本朝法華驗記」下巻冒頭説話「越後国神融法師」
 注7 録事簿の巡行（東洋・第十巻第十一号・昭和四十八年十一月）参照。
 注8 「日本歴史大辞典」第三巻（増補改訂版・河出書房・昭和四十三年八月）の「元興寺」（石田茂作氏の解説）の項参照。
 注9 「牛立町外編」（中京大学郷土研究会・昭和四十二年七月）参照。
 注10 「道文法師事」・「打聞書」・「研究と本文」・笠間書院・昭和四十六年八月。
 注11 「大日本仏教全書」・寺誌叢書第二二所収「諸寺縁起集」・長谷寺縁起参照。
 注12 暹美かをる氏の『日本靈異記における説話の形成過程』（説林・第十七号・昭和四十二年十二月）参照。
 注13 「桃太郎の母」（昭和三十一年一月・法政大学出版局）所収。
 注14 本書が、雷を「奉請」と表現しているのは「雄略紀」の「捉来」「捉取」という素朴な表現に對して、合理的に神事に則して神司などと呼び、対処しようとする後世的な意識のあらわれである。
 注15 貝原益軒著「養生訓」第五 慎色慾（参考）市村宏氏の「靈異記第一話考」（上代文学研究會会報・第十六号・昭和四十一年十一月）
 注16 「姓氏家系大辞典」角川書店・昭和三十三年十一月。
 注17 「日本靈異記」以不淨身入於元興寺四天王之所住処靈異相續
 注18 「五郡神社記」は、その祭神を天之禮日命と天津彦根命と報しているが、『神道大辞典』・第三巻（平凡社・昭和十四年六月）によれば、この二神の他に、神八井耳命と小子部連螺鳳を祀っているという説を紹介している。
 注19 「日本書紀」景行四年二月条。
 注20 「安閑紀」二年の條に「尾張国間敷屯倉」があることから、この尾張は葛城の高尾治の尾張ではないと太田氏は論及されている。
 注21 元興寺の大槻と道場法師・専修国文・第二号・昭和四十二年九月。
 注22 黒沢幸三氏は、『姓氏録』右京神別下によると、尾張と関係が深いのは、尾張連と同じく火明命五世の孫と称している子部（無姓）である。一つの推定ではあるが、道場法師はこの子部の出ではなからうか。と論じておられる「小子部氏の伝承と一寸法師譚」・文学・第四十一巻第九号・昭和四十八年九月。
 注23 「右依名古屋市中区奥町興村定氏所藏国模写 明治四十三年三月 名古屋市史編纂係」と地図に記されている。
 注24 「続日本紀」兵部三年四月条。
 注25 福光は、もと與國の人で熊養氏を称していたから、多分熊養寺のあった平端村大字額田郷の額田村主の一員であったと思う。道慈も額田氏にて、この郷の人である。
 注26 わが国における怨霊信仰と大般若經の関係について・仏教史学・第十一巻第一号・昭和三十八年八月。
 注27 「飛鳥」その古代史と風土」・NHKブックス・昭和四十五年十月。
 注28 ここにも、子部神社の怪火に見舞われた百済大寺の伝承を感し得る。
 注29 馬子が何ゆえ百済大寺で雨乞いの祈禱をしたのか疑問だが、この寺が彼の意に反して權威を失墜せしめたことは、確かである。
 注30 愛智郡には和銅二年五月に尾張宿禰乎已止（外従五位下）がいた。また、『熱田宮略記』によれば、天武朝の熱田神宮長官は、尾張連忠命で、彼は尾張の首長であった（参考）
 注31 「熱田神宮」・篠田康雄著・学生社・昭和四十三年八月。
 注32 日本靈異記の撰述と景戒・説林・第七号・昭和四十五年十二月。
 （昭和五十年九月十六日受理）